

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531150

研究課題名(和文) 小学校の特性を活用した図工科学習モデルの構築

研究課題名(英文) Building a learning model for arts and crafts utilizing characteristics of elementary school

研究代表者

蝦名 敦子 (Ebina, Atsuko)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：20302010

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、特別活動などの教科以外の機会も視野に入れて、発展的な図画工作科における授業の可能性とその意義について考察した。小学校の特性として、校外学習や学校行事が多い、一人の教師が複数の授業を担当、6学年にわたる集団生活、の3点に注目し、図工科を校外学習、異学年交流、環境、地域性に関連づけて、モデル例を実践的に検証した。
人数的にも内容的にも小学校独自の多彩な造形活動が可能である。造形表現が児童を柔軟に結びつける意義は大きく、小学校には図工科を核とした造形活動の充実が不可欠である。

研究成果の概要(英文)：This study considers the possibilities for more progressive arts and crafts learning including opportunities outside the curriculum, plus the significance of those possibilities. Focusing on the following three characteristics of elementary school: 1) A lot of off-site learning, and school events, 2) One teacher teaching multiple lessons, and 3) A communal existence over the six school years, a practical examination of each model was made of arts and crafts in relation to learning outside school, interaction between children in different school years, environment, and regional/community qualities. It was found that a wide variety of artistic activities unique to elementary school are feasible, in terms of both student numbers and activity content. Artistic expression is highly meaningful for its ability to help children bond in flexible ways, and offering a fuller range of artistic activities with a core of arts and crafts is essential at elementary school.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：図画工作 校外学習 学校行事 集団 学習モデル 造形活動

1. 研究開始当初の背景

(1) 小学校の図画工作科の内容について、これまで教科としての学習内容に関する研究がなされてきているが、小学校には教科以外にも多様な学習形態がある。また小学校図画工作科の目標は、中学校美術科と同様に最終的には「豊かな情操を養う」こととされ、情操教育や体験を重視する教科外との活動と、図画工作科は関わりが深い。しかしながらこうした教科外の活動は、教科横断的に実施されることが多く、子どもたちの交流や体験活動が主目的で、教科からの考察はなされない傾向にある。加えて一教諭の立場では、クラスや学年を跨いで教科性を打ち出すことは難しい。小学校では学校独自に様々な校外学習などの工夫がなされているが、図画工作科との関連が明快に打ち出されているとは言い難い現状がある。

(2) 他教科や図工科以外の授業との関連で、図画工作の教科性を広く捉えようとする視点は、筆者が2009年度から小学校で管理職を併任して以来、児童の学校生活全般を統括する立場になり気付かされたものである。特別活動の中で、図画工作科の内容を大規模に実践しているケースもある。教科としての限られた時間数では、なかなか体现できない図工の幅広い楽しみを、他教科や教科外活動と発展的に関連づけると、さらなる授業展開が可能なのではないか。小学校を特徴付ける様々な行事や活動を視野に入れながら、図工科との関連を積極的に意味づけることにより、それらの機会が一層、発展性を伴った造形活動の好機となり得よう。さらに表現や鑑賞のあり方をダイナミックに捉え直すこともできる。その場合、ペア学級活動のように、離れた学年と一緒に活動したり、他教科との組合せで行われたりする場合は、従来の学習指導要領の解釈では収まりきらない事態も生じる。学習指導要領の発展的な解釈と検討も必要となる。

2. 研究の目的

(1) 小学校における児童の学習活動には、各教科の他に、特別活動など各種行事や総合的な学習、校外学習、それぞれの教育方針に基づいた異年齢集団によるペア学級活動など、様々な学習形態がある。またそこでは教科横断的な取り組みがなされることが多い。本研究は、図画工作科の内容を教科として捉えつつも、閉ざされた教室の中だけでの授業ではなく、空間的にも人数的にも多様に実施される図工科以外の機会も視野に入れて、発展的な図画工作における授業の可能性と、その意義について考究する。

(2) 現小学校の特性を抽出し、小学校ならで

はの特性を生かした、より広がりのある図画工作科における学習モデルの構築を試みようとする。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、筆者が併任する弘前大学教育学部附属小学校をケーススタディとして、以下のことに着眼しながら授業実践が行われる。

1) 1年から6年までの児童の図画工作科における表現・鑑賞に関する学習内容と、学年別児童の学習能力の実態を押さえる。

2) 実施されている校外学習やペア学習などの授業内容を精査し、図工科の学習内容との関連を明確にする。その際、教科横断的な内容についてはその関わりに留意する。

3) 平成20年度版学習指導要領では、特に低学年の鑑賞内容が最も大きく改訂され、一段と内容が高度化した。子どもの実態に即した教材とその方法論を示す。

4) 教科外の活動を視野に入れた教材を考察・実践し、学習モデルとして検証する。

(2) 実践した授業からモデル例を選定して、校外学習や学校行事、異学年交流(ペア学習)環境(アート空間や校舎)地域との関わり、に分類し、図画工作科との関連で表現および鑑賞の学習内容を考察する。

4. 研究成果

(1) 校外学習と図画工作科

「図工科低学年における鑑賞授業の可能性 表現の実態と鑑賞授業の導入法をめぐって」(小1,2)では、以下のことが明らかになる。低学年では「感じたこと」が子どもから直に返ってくるため、一人ひとりの言葉をいかに受け止めるかが肝要である。現行学習指導要領で求められている「身の回りの作品などから、面白さや楽しさを感じ取るようにする」は、低学年でも十分に可能性のある結果が得られた。彼らは「面白さ」や「よさ」(中学年の目標事項)についても指摘でき、またそのような鑑賞活動に「楽しさ」を感じている事実が確かめられた。それだけに鑑賞教育をさらに充実させるためには、学年に応じて児童の実態を踏まえた授業の方法論の構築が一層大事になる。

「図工科の立体題材から生まれた共同製作 題材『そざいを生かして わたしたちのまち』」(小3)では、本題材実践において、自然発生的に生まれた共同製作に注目しながら、立体題材としての特質を析出した。第一に素材がダンボール紙だけで、接着剤を使用しなかったため、作り変えが可能であったこと。第二に社会科における校外学習が、主題のイメージ形成に有効に作用したこと。第三に子ども同士の柔軟な連帯感を生んだ

こと。それらが本題材の造形活動によって一体化し、題材と材料や接合技法、生活意識を反映した子どもの実態とマッチして、子どもの想像力が十分に発揮された共同製作になった。

では低学年が校外学習として動物園に行った時の体験が、では社会科の町探検が表現や鑑賞に効果的に取り入れられた。校外学習を通した子どもの実体験が、図工科授業における子どもの主題(表したいこと)形成に大きな効果を与えていることが判明する。

(2) 異学年交流と図画工作科

「小学校における『造形遊び』の可能性
ペア学級創作活動を通して」では、本小学校で実施された、3年生と5年生によるペア学級創作活動「巨大迷路を作ろう」の実践を取り上げた。造形遊び設置趣旨の観点から、異学年に跨る造形活動としての「造形遊び」の可能性について考察する。3年生と5年生が2名ずつの班を構成してペア学級として行われた本実践は、大きなつながり—連携を造形活動によって形づくった。学習指導要領における3年生と5年生の造形遊びの学習内容を充たし、その考え方を十分に活かした活動であったと言える。また創作活動によってペア学級活動のめあてが達成されるとともに、造形遊びが異なる2学年合同の創作活動を可能にし、遊び性を通して子ども同士の交流を深めさせることに成功した。小学校異年齢集団の交流における造形遊びの意義が、改めて確認された。

「ペア学級創作活動におけるワークシートの検証 造形遊びの視点から」では、ペア学級創作活動「巨大迷路を作ろう」の実践を、5年生の書いたワークシート(絵日記)から検証した。そして、造形遊びの意義と課題について考察した。絵日記の言葉と絵の両面から検討して、図工科の表現内容として造形遊びの特徴が改めて再確認された。同時に図工としては子どもたちの行為の活性化と、そのための指導法に関する方向付けという問題が浮き彫りになった。

と から、異年齢の子どもたちが協同で交流するというめあてに対し、図工科の造形遊びが有効であることが実証された。創作活動によって異学年や多くの子どもたちを、一つに結びつけることが可能であることが検証された。

(3) 環境(アート空間や校舎)と図画工作科

「小学校におけるアート空間の創出 弘前大学教育学部附属小学校の試みを通して」は、本校に取り残されてあった空き地が、2011年にアート空間(パティオ)として整備された事柄について論じた。パティオが完成

するまでの経緯と、そのデザインができるまでのプロセスに焦点が当てられた。彫刻家塚本悦雄氏によってデザインされ、そのデザインの説明については塚本氏が、「学校と環境」という観点から、建設に至ったその意図について筆者が言及した。

「アート空間としての活用 弘前大学教育学部附属小学校を事例として」では、整備されたパティオに関して、アート空間としての活用の実態について考察した。本場所が彫刻作品として、それ自体鑑賞に堪える場であるとともに、図工科の授業「造形遊び」を通して、パティオの造形的特徴から動機づけられた児童が、新たに空間としてのスペースを活かしていることが判明する。低・中学年ともにその空間に積極的に関わって、本場所がアート空間として造形的に再創造されていく場になっていることが確かめられた。

「小学校高学年の造形的特徴『奥行き』に関する一考察」では、平成20年度版小学校学習指導要領に新出の[共通事項] 高学年の造形的特徴「奥行き」について検討した。それは題材「校内の風景」で実践され、本校6年生の描いた絵画117名分を資料として、児童が1)奥行き感をどこに見出し、2)どのように表現したか、について分析した。その結果、ほとんど全ての児童が「奥行き」を校内から多様と感じ取っている事実が判明する。ただし、奥行き感が無理なく表現されているのは全体の約6割である。約4割の児童については、その奥行きを感じていても、表現しきれていない事態が明らかになった。

から、パティオの造形的空間や校舎などを通して、環境と図画工作科の相互関係について論証した。

(4) 地域性と図画工作科

「地域性を取り入れた図工授業の実践 題材『ようこそ、わたしたちのまちへ』を通して」では、2011年に本小学校4年3組の児童31名に実施された題材「ようこそ、わたしたちのまちへ」に着目し、本題材の特色について検討した。弘前市の伝統的なねぶた祭りリンクさせたことにより、鑑賞活動が充実し広がりのある教材になった。また地域のねぶた祭りに関して、こどもの参加や灯籠作りの在り方について、問題提起をすることにもなった。本題材実践が、ねぶた祭りを念頭において総合的な学習などで時間が割かれたのではなく、あくまでも図工の授業として実施されたこと、すなわち児童が自由にモチーフを選び、教科内容を踏まえて製作した灯籠である点に、本題材の特色があった。

「図画工作科における地域性を視野に入れた教材化 ねぶたの灯籠製作をめぐって

」では、引き続き 2011～2012 年度にかけて 2 度にわたり本校で実施された、ねぶたの灯籠製作に関する授業実践に注目した。そして、地域とリンクさせた図工科教材の可能性について検討した。題材 1「ようこそ、わたしたちのまちへ」(小 4)はねぶた絵の製作に、題材 2「わたしたちのめざすかたちに～小さな大工さん～」(小 4)は、灯籠の骨組み製作に焦点が当てられて、木工作の授業として展開された。2 年間にわたって題材が深化していき、どちらの授業でも作られた灯籠を持って子どもたちがねぶた祭りに参加したが、授業の中から地域の文化財をモチーフとした、新しい灯籠のスタイルが創り出された。祭りの中でも鑑賞が行われ、図工科での製作を通して地域の連携が強められることが実証された。

「図画工作科における木工作題材の検討と課題」では、小学校 4 年生を対象とした題材「わたしたちのめざすかたちに～小さな大工さん～」(小 4)を通して、小学校で実施する木工作の授業について検討し、課題を新たに抽出した。小学校では、特に安全な環境を整えることが大切であることや、製作途中の鑑賞を随所に取り入れた本題材が小学生の表現意欲を高め、充実した木工作の内容になることが実証された。また小学校教師が、事前に克服すべき木工作の基礎技能の課題が提示された。

「小学校低学年及び中学年の木工作に関する実践的考察 中学校技術・家庭科[技術分野]との関連を視野に入れて」では、本小学校 2 年生と、4 年生によるそれぞれの工作の授業を振り返り、小学校図画工作と中学校技術分野との学習指導要領を踏まえながら、工作に関する小学校低・中学年の実態と課題について検討した。技術分野の教科性を配慮すると、図工科学習指導要領の工作に「仕組み」(構造・機能に連関)の理解が必要である。児童は積極的に材料や用具を使いながら、使い方がわかると繰り返すことによって、機敏で上手にできるようになる。低・中学年の工作の意義が改めて認められるとともに、限られた時間で技能の習得を充実させるためには、小学校全体の系統だったカリキュラムの見直しが必要であるとした。

地域の伝統的なねぶた祭りに関連して、ねぶた灯籠作りには、図画と工作、書、理科の電気の学習など、小学校の学習内容が総合的に内在している。また絵のモチーフには社会科の校外学習が効果を上げた。弘前ねぶた祭りの伝統と教材が一体化し、学校から地域へと図工科の学習が大きく展開していった。また、平成 20 年度版学習指導要領で改訂された学習内容にも併せて言及したが、低学年の鑑賞の充実、低・中学年の「つくりたいもの

をつくる」から「工作に表す」に変わった点など、いずれも現実的で妥当性のあることが証明された。

(5) 学校行事と図画工作科

「小学校における集団がもたらす造形活動 学校行事と図工科の表現を比較して」は、本研究の総括となる実践的論考である。小学校で児童が 6 年間にわたって集団生活する点に注目し、「学校行事による造形活動」と「図工科の表現」を対比させながら、相互の関連について考察した。学校行事としては、幼小交流会や学習発表会の事例を挙げる。「学校行事による造形活動」は、図工科の内容を基本としながらも学年単位の大きな活動となり、児童の連帯感を高める。また「図工科の表現」においては、主題の「表したいこと」が、学校行事として集団で経験する生活体験と密接に関連し、題材や児童の発想・構想の重要なファクターとなっている。図画工作の教科としての重要性を改めて確認するとともに、学校教育における集団的造形活動の意義が極めて大きいことを明確にした。

(6) 結論 研究の総括

本研究では、小学校 1 年から 6 年までの各学年の児童と、図画工作科の内容として表現(造形遊び、絵や立体、工作)と、鑑賞の分野を全体的に取り上げた。その中で、校外学習や学校行事、ペア学習や異年齢集団による交流、環境、地域との連携、と関連づけながら、図画工作科の視点から造形活動が検討されたことになる。これらの各実践から図工科の内容がどのような発展性を持ち、学校生活の中で児童が体現できるのか、図工の授業の発展的な広がりについて具体的に展開した。また、小学校の特性を活かした上で、それぞれの学年において図工科の学習内容に新たな可能性のあることが実践的に明らかになった。

小学校の特性としては、大きく 3 点に注目した。1) 学校 - 校外学習、学校行事が多い。2) 教師 - 一人の教師が他教科の授業も行う。3) 児童 - 6 学年の集団生活。みんなでつながり合いながら、集団生活の学びをする。中学校になると、美術が得意な生徒が中心となっていく傾向にある共同制作でも、小学校では一人ひとりが柔軟に結びついて、個を発揮させながら、造形表現のダイナミズムを感じとらせることができる。これまでの考察から、他教科や教科外の活動を視野に入れて造形活動を捉えると、人数的にも内容的にも小学校独自の多彩な造形活動が可能である。造形的行為が児童を柔軟に結びつける意義は大きく、小学校には図工科を核とした造形活動の充実が不可欠である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

蝦名 敦子、小学校における集団がもたらす造形活動 学校行事と図工科の表現を比較して、弘前大学教育学部研究紀要クロスロード、査読無、第18号、2014、pp.27 - 36

蝦名 敦子、小学校低学年及び中学年の木工作に関する実践的考察 中学校技術・家庭科[技術分野]との関連を視野に入れて、美術教育学、査読有、第35号、2014、pp.153 - 163

蝦名 敦子、アート空間としての活用 弘前大学教育学部附属小学校を事例として、美術教育学研究、査読有、第46号、2014、pp.45 - 52

蝦名 敦子、図工科の立体題材から生まれた共同製作 題材「そざいを生かして、わたしたちのまち(3年生)を通して」、芸術文化、査読有、第18号、2013、pp.33 - 44

蝦名 敦子、図画工作科における地域性を視野に入れた教材化 ねぶたの灯籠製作をめぐる、弘前大学教育学部研究紀要クロスロード、査読無、第17号、2013、pp.41 - 50

蝦名 敦子、小学校高学年の造形的特徴「奥行き」に関する一考察、弘前大学教育学部紀要、査読無、第109号、2013、pp.17 - 25

<http://hdl.handle.net/10129/5076>

蝦名 敦子、地域性を取り入れた図工授業の実践 題材「ようこそ、わたしたちのまちへ」を通して、芸術文化、査読有、第17号、2012、pp.15 - 30

荒井一成・古川香・堤司・蝦名 敦子、図画工作科における木工作題材の検討と課題、弘前大学教育学部紀要、査読無、第108号、2012、pp.99 - 106

<http://hdl.handle.net/10129/5059>

蝦名 敦子、ペア学級創作活動におけるワークシートの検証 造形遊びの視点から、美術教育学、査読有、第33号、2012、pp.121 - 132

蝦名 敦子・塚本悦雄、小学校におけるアート空間の創出 弘前大学教育学部附属小学校の試みを通して、芸術文化、査読有、第16号、2011、pp.13 - 22

蝦名 敦子・成田宣子、小学校における「造形遊び」の可能性 ペア学級創作活動を通して、弘前大学教育学部研究紀要クロスロード、査読無、第15号、2011、pp.27 - 36

蝦名 敦子、図工科低学年における鑑賞授

業の可能性 表現の実態と鑑賞授業の導入法をめぐる、大学美術教育学会誌、査読有、第43号、2011、pp.71 - 78

〔学会発表〕(計16件)

蝦名 敦子、小学校における集団がもたらす造形活動 学校行事と図工科の表現を比較して、第36回美術科教育学会奈良大会、2014年3月30日、奈良教育大学

蝦名 敦子、図工科の立体題材から生まれた共同製作—題材「そざいを生かして、わたしたちのまち」(3年生)を通して—、東北芸術文化学会第65回研究例会、2014年2月22日、弘前大学

蝦名 敦子、小学校におけるアート空間に関する一考察、第52回大学美術教育学会京都大会、2013年10月13日、京都教育大学

蝦名 敦子、アート空間の活用 弘前大学教育学部附属小学校を事例として、第19回東北芸術文化学会大会、2013年7月7日、石巻専修大学

蝦名 敦子、木工作に関する実践的考察 小学校2年と4年の授業を通して、第35回美術科教育学会島根大会、2013年3月29日、島根大学

蝦名 敦子、図画工作科における地域性を視野に入れた教材化、第51回大学美術教育学会大分大会、2012年10月20日、大分大学

蝦名 敦子、中学校技術分野との関連を配慮した木工作 小学校中学年の授業実践を通して、東北芸術文化学会第61回研究例会、2012年10月19日、福岡県立もち文化センター

蝦名 敦子、地域性を取り入れた図工授業実践、第18回東北芸術文化学会大会、2012年7月7日、仙台市情報・産業プラザ

蝦名 敦子、小学校におけるアート空間の創出 弘前大学教育学部附属小学校の試みを通して、第34回美術科教育学会新潟大会、2012年3月28日、新潟大学

蝦名 敦子、小学校における環境とアート空間に関する一考察、東北芸術文化学会60回研究例会、2012年2月18日、弘前大学

蝦名 敦子、小学校高学年の造形的特徴「奥行き」に関する一考察、第50回大学美術教育学会宮城大会、2011年9月25日、宮城教育大学

蝦名 敦子、ペア学級創作活動におけるワークシートの検証 造形遊びの視点から、第17回東北芸術文化学会大会、2011年7月10日、仙台市情報・産業プラザ

蝦名 敦子、異学年による造形遊びの展開、

第33回美術科教育学会富山大会、2011年3月27日、富山大学

蝦名 敦子、図工科低学年の鑑賞授業に関する一考察、第49回大学美術教育学会東京大会、2010年9月20日、武蔵野美術大学

蝦名 敦子、図工科低学年における鑑賞授業の有効性について、第16回東北芸術文化学会大会、2010年7月10日、仙台市情報・産業プラザ

蝦名 敦子、図工科の鑑賞教材に関する一考察 弘前大学教育学部附属小学校6年生の授業実践を通して、東北芸術文化学会第56回研究例会、2010年2月27日、弘前市百石町展示館

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蝦名 敦子 (EBINA, Atsuko)
弘前大学・教育学部・教授
研究者番号：20302010

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：